

STAND BY ME

(男2) 一幕六場

あらすじ

東京オリンピック開催に沸く1964年10月、国選弁護士・橋詰博は東京拘置所にいた。大企業を恐喝して疑いで拘留されていた自称降霊師の弁護するために接見に来たのだ。しかし、そのニセ降霊師 坂本知弘は博の幼なじみだった。

戦時中、パラシュートで米軍機から脱出した兵隊を二人は山中でみつけた。最愛の兄を亡くしたばかりだった博は、米兵を殺そうとする。そのとき知弘は……。博の記憶はそこで途絶え、知弘は行方不明になった。その知弘が、企業恐喝の嫌疑で目の前に。

ちやらんぼらんな知弘を弁護していくうちに、博は大変な現実にぶつかる。知弘はニセ降霊師なのか？またあの夏の日、山中では何が起こったのか？

上演記録 平成二一（2009）年度 山梨県校演劇大会最優秀（県第一位）

平成二一（2009）年度 関東校演劇研究大会・茨城大会 参加

連絡先

t040125@yahoo.co.jp

はやおとろじ（砂澤雄一）



甲府第一高等学校演劇部 平成二十一年度関東大会参加作品

はやおとうじ・橋詰博・坂本知弘 作

STAND BY ME

登場人物

男1・・・弁護士 (橋詰博)
男2・・・降霊術師 (坂本知弘)

1

舞台は暗い。中央にある机に徐々にライトが当たる。

SE 東京オリンピックの開会式のファンファーレの音

男1の声 昭和三十九年十月十日、日本中がオリンピックに沸いたこの日、私は東京拘置所の接見室にいた。：兄さん、日本はオリンピックを開催できる国になりました。

BGM 「Stand by Me」(T.T.達郎Ver.)

舞台暗くなっていく。

舞台奥 引割り幕が少しずつ開いていく。夏空に浮かぶ入道雲が見えてくる。

SE 空襲警報のサイレンの音

戦闘機(プロペラ)の飛び去る音

男1 敵機が落ちた

男2 行ってみよう

男1 落下傘だ、敵は生きてる

男2 みんなでいこう。捕まえるんだ

男1 危ないよ。

男2 お前、兄さんの仇をとりたくないのか

舞台再び暗くなる(引割り幕しまる)

男1 えっ？

男2 あなた、禿げに墨塗ってごまかしていたじゃない

男1 なにを突然

男2 あなたの好きだった金物屋の珠子さん、結婚しちゃったわよ

男1 ええーッ、そうなんですかって、ちょっと待ってください。なぜ、マリリンモンローがそんな日本の片田舎のきわめてローカルな話題を知っているんですか。マリリンモンローというのはあまりにも嘘っぽいのに、私に関するプライベートな話題はどれも真実っぽい、あ、あなたは一体何ものなんですか？

男2 お兄さんの仇はとったの？

男1 ……どうしてそれを。しかもそれをアメリカ人のあなたに言われるとは。

…日本は復興しました。まもなく終戦から二十年になる。あなたも知ってのとおり今日はオリンピックの開会式です。

男2、マリリンの口調はやめて

男2 日本が復興したことで、お前の兄さんの仇をとることは関係がない

男1 ……

男2 あの日のことを忘れたのか、博

男1 ……お前はだれだ？

男2 昭和二十年七月二十一日一機の敵戦闘機が俺たちの住む村の山に墜落した。飛行士は落下傘で脱出、敵兵が青い空に漂うように落ちてくるの俺たちは見た。忘れたわけじゃないよな博。あの日お前がなにをしたか。俺はよく知っている。そのお前が、今、俺の目の前に国選弁護士として座っているんだ。

男1 ……お前、……トモ……なのか。……おい。お前、トモなのか。

BGM(オリンピックマーチ)

暗転

2

男1 の声 ……兄さん、今日日本は金メダルをとりました。凄いです。本当に日本は頑張っています。……あの降霊術はトモでした。そう坂本知弘です。あの日以来三日間も

行方不明になっていた鍛冶屋のトモだったんです。

舞台明るくなる。二人席に着いている。

男1 坂本さん

男2 トモでいいよ、博

男1 (きっぱりと) 坂本さん!。公判が近づいています。あなたは自分をどうしたいんですか。あなたの主張は何なんですか。私はあなたの口から真実を語ってほしいんです。そうでなければ公判維持すら難しい。あなたは…

男2 変わってないな。博。お前、正義感だけは誰よりも強かったもんな。曲がったことは脅されてもなかった。

男1 坂本さん。真面目に聞いてるんですか。

男2 俺はいつでも真面目さ。降霊術師なんていうと、いかにもうさん臭いが、これだって本当だ。

男1 昨日の「私、マリリン、よろしくね」っていうのを見ても信じろと言うんですか

男2 うまいな

男1 どうも、じゃなくて、坂本さん

男2 トモでいいって。しかし相変わらずイジリがいのある奴だな、お前。安心したよ

男1 いつから詐欺師になったんだ

男2 失礼なことというな(笑) 詐欺師じゃないよ。降霊術師だ

男1 ねらいは何だったんだ。金か。大企業脅して金をせびりとうとしたのか

男2 いいか、博。俺がインチキ降霊術師だったとして、そんな者の言う脅しを大企業が聞くとと思うか。企業っていうのはシビアなもんだ。そんな者に一銭だって金なんて出さないよ。

男1 じゃあ、お前のねらいはなんだったんだ

男2 ねらいなんかあるか。先祖の霊達がああ土地はあのままにしておいてくれって言うから、その通りに言ったまでだ。

男1 トモ、時代はどんどん移り変わる。日本は復興した。東京タワーがたち、夢の超特急が200キロで走る時代だ。レジャー開発は地方を潤すんじゃないか

男2 お前、本気で言っているのか。

男1 ああ

男2 馬鹿だな。弁護士になる頭があってその程度のことも分からないのか

男1 どういうことだ

男2 俺が開発するなといった山の住所をしてみる

男1 ……俺たちのいた村に近いのか

男2 お前のおめでたさにはまったく驚くよ。市町村合併で村の名前は変わった。だいた
い俺たちはあの山を婆山と呼んでただろう。正式名称を知らなかった。

男1 婆山って

男2 そうだ、あの日、グラマンが墮ちた山だ

男1 婆山がゴルフ場…

男2 もう山じゃなくなる、切り崩すんだ。当然、俺やお前が育ったあの村はすっかりと
姿を変える。村に金がおちて豊かになるから良いって言えるか、お前。

男1 ……

男2 お前って本当に、あつ、来た来た来た来たきたーっ（がくっ）

男1 おい、トモ

男2 やあ、私は第十六代大統領 エイブラハム・リンカーンである。

男1 お得意のレパトリーって感じだな、是非英語で喋ってほしいもんだ

男2 天は人の上に人を作らず 人の下に人を作らず

男1 おい、それは福沢諭吉だろ

男2 というわけで博くん

男1 どういうわけだ

男2 あと十年もすれば、今の乱開発のつけが回ってくるのは必定だ

Stand By Me

男 1 それ言うためにリンカーンを降ろさなくてもいいだろう

男 2 ボーイズビー・アンビシヤス

男 1 クラーク博士かおまえは

男 2 … Let it be told to the future world … that in the depth of winter, when nothing but hope and virtue could survive… that the city and the country, alarmed at one common danger, came forth to meet [it].

男 1 それは…

男 2 司法に携わる人間ならきいたことがあるだろう。洋の東西は問わない。私達が目指す道はもともと一つしかないのだ。先人の流した汗と涙の上にしか国はなく自由はない。博くん、君はいい。故郷を捨て、首都の空の下、自分の仕事をすればいい。しかし、あの村でうまれ育ち、そして死んでいく者はどうする。いや、すでに死んでしまった人たちはどうすればいいんだ。

男 1 …

男 2 例えば君の兄上はどこに帰っていけばいいんだ。

男 1 アメリカ人とは思えない発想ですね。

男 2 笑止。君は憎き敵国のことをいまだに何も知らないのか

男 1 憎んでいるわけじゃない。個人的な恨みでもない。アメリカはもはや敵国ではない。友好国だ。

男 2 君が最も恐れていることを言い当てて見せようか

男 1 なんだって？

男 2 君は自分の憎しみが風化することが恐いんだ。いや日々憎しみを失っていく自分自身を恐れているのだ。

男 1 なにを根拠に

男 2 博君、君はあの日から一步も前に踏みだせないんだろう

男 1 …違う

男 2 違うないな、博君。
君は兄上を尊敬していた。そしてこの国を愛していた。

男1 ……

男2 だから君はあの日…

男1 やめろ、やめてくれ

男2 君は年をとり大人になった。でも君はいまでもあの日のままだ。

君は自分を許せない。弁護士になった自分を認めることができないでいるんだ。

男1 いいかげんにしろ、俺は弁護士だ、

トモ分かってているのか、被疑者はお前なんだぞ。これはお前が起こした事件で、俺はその弁護をしているだけなんだ。俺のことはどうでもいい。お前がなにをしたのか、真実を語ればいいんだ。それだけだ。

男2 ごまかしちよ、博、おまん、一生あの婆山途中で過ごすずらか。めんさませ。戦争は終わった。日本は復興しただつて、おまん、さつき言つたずら。だつたらおまんの戦争も終わらせろ

男1 トモ、おまんに何がわかるつうだ。おれのいつたいなにがわかるつうだ

男2 逆だ、博。お前はなにも分かっていない。いや分かるうとしていない。現実をみる。お前はお前だ。他のだれでもないんだぞ。歩きだせ。歩きだすんだ。今すぐに。

暗転 BGM (「Stand by Me」LiliAna Rose Ver.)

3

男1の声 ……兄さん、とんでもないことになってきました。昨日初公判があつたんです。

検察側が僕の知らない事実をどんどん公表してきます。トモはといえば、公判中に例の「来た来た来た来た来た」(かくつ)をやつて退廷させられるし…。この裁判全く勝機は見いだせません。トモはただインチキ降霊術師なんです。僕には彼が理解できません…

男1 坂本さん、昨日の公判、あれはいつたいなにがわかるつうですか

男2 何って？

男1 あなた、無罪を主張しましたよね

男2 ああ…まずいのか

男1 いいえ、まずくないですよ、しかし、もし無罪を主張したいならなぜあそこでマリリンモンローを出しちゃうんですか

男2 いや、出しちゃうとかっていう問題じゃないからな。俺の意志とは関係なくマリリンが降りてくるわけよ

男1 そんなに頻繁にマリリンが降りてくるわけじゃないじゃないですか。どう考えてもあなたがそういう演技をして公判を妨害しているようにしか見えませんか、普通。誰が見たって。法廷侮辱罪になりかねない

男2 なんかさ、マリリンは俺のことが好きみたいなんだよ

男1 ふざけるな、トモ、お前のマリリン目当てに新聞記者まで来る始末だ！やる気がないなら俺は降りるぞ。というか降ろさせてもらうよ。何だよ昨日の…。おまえ、中部日本興産だけじゃなくて親会社の三共(ミツトモ)にまで乗り込んでるんじゃないか。言ったか俺にそのことを。言っていないよな。何で黙っていたんだ。弁護士は俺だけが知らないなんてあり得ないだろう。おまえ助かりたくないのか。

男2 まあ、助かりたいか助かりたくないかと言えば…助かりたくないかな

男1 おいつ

男2 いいか、博。この事件、裏はものすごく深いって気付かないか？

男1 何だよ、急に

男2 考えてみる、中部日本興産があんな片田舎にゴルフ場開発をしようか？都心からの連絡だって悪い場所だ。乗り換え乗り換えで3時間以上はかかるし、しかも電車は一時間に一本しか通らない。県道だって手前の渋崎(シブサキ)までで、俺たちの村には通っていない。

男1 それがどうしたって言うんだ

男2 相変わらずおまえは馬鹿だなー

男1 おまえに言われたくないよ

男2 俺たちの村に観光資源といえるものがあるか？

男1 …まあ、…(サバサバと)ないかな

男2 ないだろう、あるわけないさ、交通も不便、特に名所旧跡もない俺らの村に普通ゴルフ場なんて建てないだろう

男1 まあな

男2 ゴルフ場開発なんてウソっぱちなんだよ

男1 えっ、じゃゴルフ場できないのか

男2 いや作りはするかもな、形だけ。で、途中でなにか理由を見つけて中止する。

男1 何のために、何のためにそんな手の込んだことをしなきゃならないんだ。

男2 中部日本興産の親会社はミットモだ。知っての通りどでかい総合商社だ。世界のミットモだ。そんなところがこんな片田舎のゴルフ場開発に乗り出すこと自体がすでにうさんくさいだろう。そう思わないか。

男1 まあ言われてみれば

男2 おまえ人に言われないとそんなことにも気がつかないのか

男1 そういう訳じゃ…

男2 うさんくささで言えば向こうの方がインチキ降霊術師より千倍うさんくさいだろ

男1 あっやっぱりインチキなんだ

男2 ばーか、俺はインチキじゃないよ、おまえがそう思ってるみたいだから、あえて言うてやったんだよ

男1 いや違うな、今ぼろっと本音が出たんだ、そうだ、そうに違いない

男2 博！おまえ馬鹿か、そんなことはどうでもいいんだよ、なぜミットモがこれに絡んでいるかっていう方が何倍も大事だろ

男1 いや、俺にとってはおまえがインチキ降霊術師だと告白したことが遙かに大事だ

男2 はあ：おまえ一人でそうやってる。うだつの上がない二流弁護士にまたとない活躍の機会が巡って来てるっていうの…

男1 二流で悪かったな、でも俺は二流で結構だ。おまえみたいな山師的根性で有名になるうなんて思っていないよ

問

男2 博、おまえなぜ弁護士になったんだ

男1 藪から棒に何だよ

男2 おまえの兄さんが法科の学生だったからか？

男1 ……なんだよ、…兄さんは関係ないだろ

男2 おまえの兄さん、村で初めて帝大に入った秀才だったよな

男1 ああ

男2 おまえの一番の自慢だった…

男1 ……何が言いたいんだ

男2 兄さんの人生は兄さんのものだ

男1 あたりまえだ

男2 そうか…、俺にはそうは見えないがな

男1 俺が兄さんの夢を肩代わりしてるって言いたいのか

男2 そうだ

男1 兄さんは俺が肩代わりできるような人じゃない

…俺の憧れなんだ…永遠に辿り着けない目標だ

男2 兄さんだって普通の人間だ

男1 ……

男2 お前に尊敬されて嬉しいだろうが、神格化されても困るはずだ。

男1 お前には分からないよ、トモ…。

兄さんは九歳年上だった。いつも穏やかに笑っていた。

小さい頃よく昔話をしてくれた。…兄さんの桃太郎は少し変わっていて…話を止めては必ず聞くんだ。「博、吉備団子作っている時、おばあさんはどんな気持ちだったと思う。…送り出す時おじいさんはどんな気持ちだったと思う。…負けたとき、鬼はどんな気持ちだったと思う。考えてみるんだ、お前のその心で。」

怒ったところなんて見たこともない。

俺にとっては、…兄という以上の存在だった…。

その兄さんが死んだ。生きていればきつと何だかってできたはずの人が…。弁護士は選択肢の一つに過ぎない。

兄はこの国のために死んだ。その果てしない可能性を抛(なげう)って、俺たちのために死んだんだ。俺にとって兄は神だ。神格化しているのではない。事実がそうなの

Stand By Me

んだ。

男2 兄さんが聞いたらさぞかし悲しむだろうよ。

男1 …なんだって

男2 橋詰渉(わたる)陸軍中尉が聞いたら、きっと悲しむだろうと言ったのさ
お前が兄さんを勝手に神にした理由は他にある。お前だっとうすうすう気がついてる
んだらう。

男1 …

男2 一つには自分の至らなさを「まかすため。

男1 何だと！

男2 そしてもう一つは、お前が犯した罪を封印するためだ。

男1 俺が犯した罪…

BGM (「Stand by Me」LiliAna Rose Ver.)

舞台暗くなっていく。

舞台奥 引き割幕が少しずつ開いていく。夏空に浮かぶ入道雲

SE 空襲警報のサイレンの音

戦闘機(プロペラ)の飛び去る音

男1 敵機が落ちた

男2 行ってみよう

男1 落下傘だ、敵は生きてる

男2 みんなでいこう。捕まえるんだ

男1 危ないよ。

男2 お前、兄さんの仇をとりたくないのか

男1 兄さんの仇…

男2 いくぞ

男1 ああ

男1の声 落下傘は僕たちが「一本立ち」と読んでいた大きな松の木にひかかっていた。アメリカ兵は糸の絡まった操り人形のようにぶら下がっていた。明らかに大けがをしていた。左腕はだらんと力なく垂れ下がりが折れているようだった。それでも彼は笑顔を作りながら僕たちに語りかけた。

アメリカ兵の声(実際には英語)

やあ、少年達、元気かい。今日はブツダへのお祈りはすませたのかい…

ああ、もしお願いできるなら、下に降ろしてほしいんだ。左腕と肋骨を折っちゃってね、結構きついんだよ、この姿勢は…

君たちにブツダの慈悲があるならぜひ、お願いしたいんだ

男2 外人って初めて見た

男1 …兄さん

男2 怪我してるみたいだ…どうしようか、博

男1 殺す

男2 え？

男1の声 それからのことはあまり覚えていない。何人かが村において大人に知らせると言っかけてかけた。トモは怪我してるみたいだと言った。僕は…僕は…何をしたんだ

男2 博、ちよつと待て。大人達が来るまで待て。相手は怪我人だ、それに抵抗できない。早まるな

男1 トモ、お前さつき言ったよな、兄さんの仇をとりたくないのかって

男2 ああ、言ったよ。興奮したんだ。でも考えてみる、直接お前の兄さんを殺したのはこいつじゃないし…

男1 関係ない…

暗転

男1の声 それから僕はどうしたんだ…思い出せない
でも僕はとつても恐ろしいことを…してしまったような気がする
気がついたとき、僕は家にいた。母からトモの姿が見えなくなったと聞かされた。肝心のアメリカ兵のことは誰も教えてくれなかった。

明転

男2 お前はあの日自分がしたことを心の奥深くに封印した。今では思い出すことすらできない。でも、お前はずっとおびえている。自分が何をしたのか。そして、こんな自分が弁護士になつていいのかと。

男1 …

男2 博…。俺はお前があの日何をし、どうなったかを知っている。俺だけが知っているんだ。そして、それを伝えるために俺は導かれてここに来た。信じる、俺はインチキ降霊術師なんかじゃない。先祖の意志を伝える者だ。

男1 トモ。お前が言っていることを信じるなんて無理だ、分からないのか。

お前は中部日本興産をインチキな降霊術で恐喝した。お前のネライは金だ。誰がどう見てもこの事件はそうとしか考えられない。お前に勝ち目は無い。後は量刑をどこまで軽くするかだ。でも、お前は法廷で明らかにインチキな降霊術を繰り返し、裁判官の心証を著しく悪くしている。もうどんな優秀な弁護士であってもお前をかばいきれないだろう。

男2 お前の兄さんでもか

男1 ?

男2 聞け、博。確かに俺が法廷でやっていること、あれはインチキだ。

男1 やっぱり

男2 勝てるとも思っていない。でもな、それには大きなネライがあるからだ

男1 もういいよ、トモ。悪いがつきあいきれない。詐欺師の片棒を担ぐのはこりこりだ。お前が同じ村の出身の幼なじみだという理由だけで、不正を自覚的に行っている人間の弁護はできない。今日で俺たちの関係は終わりで。

男2 逃げ出すのか

男1 逃げ出す?…ああ、逃げ出すんだ、お前みたいな詐欺師からな

男2 ……

男1 じゃあな

男2 あの日お前はあのアメリカ兵に何をしたのか、一生知らないままでいいんだな

男1 …

男2 分かった。さよならだ。…一つだけいいことを教えてやる。

あの日飛んできたグラマンな、B29の護衛で来て高射砲に当たって墜ちたってことになってたが：あれはウソだ。

男1 何だつて？

男2 グラマンは婆山を偵察に来たんだ。そして何らかのトラブルで墜ちた。

男1 婆山を？

男2 そうだ。

男1 なぜ？

男2 俺の弁護をやめる奴に教えることはできない。

男1 おい

男2 じゃあ、サービスでもう一つ教えてやる。あの日婆山で起こったことは軍、警察、県のどこの記録にも明記されていない。新聞にも載っていない。と言うより、そんな事は無かったことになっている。あのとき山に登った俺たちの仲間でさえ、今聞けば「そんなことあったっけ？」と言うに違いない

男1 まさか

男2 本当さ

男1 どうしてそんなことが

男2 知りたいだろう

男1 …

男2 素直になれ

男1 …ああ

男2 そう来なくちやな、兄弟。もっと顔を近づける
俺は、公判中だけは命の保証がある。判決が出た後はかなりまずいだろう。下手すれば拘留所内で闇に葬られることだってあり得る。
お前だけが頼りなんだ、博。俺を助けてくれ

男1 俺がお前を助ける？

男2 ああ、そうさ。お前は弁護士なんだろう？

4

男1の声 …… 兄さんがもし生きていてこの公判の弁護を担当していたら…… あなたならどんな風に戦うんだろう。…… 僕はやり抜くことができるんだろうか…… 何か言ってください、兄さん……

男1 では私から被告人に質問します。あなたは中部日本興産のゴルフ場開発責任者に開発をしようとすれば関係者が次々に死ぬことになるだろうと言う意味のことを言つたとされていますが、これは本当ですか。

男2 はい、本当です

男1 あなたのこの発言には何か根拠があるのですか

男2 はい、あります

男1 それは、どういうものですか

男2 はい、私達はあの山を婆山と呼んでいました。婆山は私達の祖先の眠る山です。私はその先祖の霊から、ゴルフ場開発のことに開発すると多くの死者が出るということとを聞きました。

検事の声 異議あり、被告人の発言は根拠の無い、公判を長引かせるためだけのものです。

裁判官の声 意義を認めます。弁護人は何を証明したいのですか

男1 裁判官、弁護人は被告が中部日本興産のゴルフ場開発の計画を調査や聞き込みなどによって事前に知り得なかったことを証明したいと考えています。

裁判官の声 分かりました。質問を続けて下さい。

男1 有り難うございます。

被告人が先祖の霊から通称婆山のゴルフ場開発の話しを聞いたのはいつ頃ですか

男2 昨年の四月頃だったと思います

男1 それを知ってあなたはどうしましたか

男2 中部日本興産に電話して確かめました。

男1 裁判官、弁護人はここで中部日本興産が昨年四月十二日に被告からの電話を受け取っていたことを示す受信記録を証拠品第二十三号として提出します。
その電話の中で中部日本興産はなんと答えましたか

男2 そのような計画は無いと言っていました。

男1 裁判官、弁護人は中部日本興産の担当者を証人として召還したいと思います。このゴルフ場開発はいつから進行していたものか、またどのような範囲の人間が知っていたかを確認するためです。被告人が四月十二日段階でこの計画を知りうる事が可能だったかどうかを証明します。質問を続けます。先祖の霊はどうして開発を続けるると多くの関係者が死ぬことになると言ったのですか。それはいわゆる祟り（たたり）というものですか。

男2 祟りで死ぬとは言っていないませんでした。

男1 では何で死ぬと言ったのですか

男2 あの山には、多くの人間を死に至らしめる強力な毒薬が埋蔵されており、その被害によって多くの死者が出ると言っていました。

法廷がどよめく

男1 その毒薬とは何ですか？

男2 よくは知りませんが戦時中に満州で開発され極秘裏に本土に搬送された毒ガス兵器の類だと言っていました。

法廷更にどよめく

裁判官 静粛に

男1 あなたはそのことを中部日本興産の人間に言いましたか

男2 はい、いいました

男1 おかしいですね。中部日本興産の事情聴取では一言もそうした事実には触れられていませんが…

男2 私もそのことはおかしいなと思っていました。

男1 そうした危険な山をあえてゴルフ場開発する利点は何だと思えますか

男2 先祖の霊はこういつてました。会社の幹部、特に中部日本興産の親会社であるミットモはこの事実をよく知っている。しかし工事担当者は知らないで危険なんだと。

男1 ミットモはこの事実を知っていてなぜ開発を進めるのですか

男2 ミットモは戦時中から軍と協力し、この山に密かに毒ガスを埋蔵する仕事を請け負

っていたそうです。そこに最近になって第二新幹線という構想が浮上してきました。これは今から五十年後くらいに、チューブの中に強力な磁場で浮上させた車体をジェット推進で走らせ時速五百キロで東京と大阪を結ぶというものです。

法廷ごよめく

男1 この間新幹線が開通したばかりなのに、そんな計画があるというのですか

検事 異議あり、被告人の発言は単なる妄想に過ぎません

裁判官 裁判官はもう少し話を聞いてみたいと思います。続けて下さい

男1 その計画とミットモには何か関係があるのですか

男2 ミットモは毒ガス兵器の秘密をネタに将来、第二新幹線の通過ルートに当たる可能性のある婆山一体の土地の権利を国から譲り受けようとした、と言うのが理由だと言っていました。

「特ダネだ」と言う声とともに法廷から出て行く新聞記者達の声と騒然とする法廷内

男1 ではこれは、ミットモが戦時中の毒ガス兵器の秘密をネタに国を強請ゆすつた恐喝事件だと言うことでしょうか

男2 結果的にはそういうことです。ただ私が先祖の霊から聞いたのは、故郷に山をそのままにしておいてほしいという願いです。

男1 以上で弁護人の質問を終了します。

暗転 BGM 「Stand by Me」(John Lennon Ver.)

5

男1の声 兄さん、公判は思わぬ方向に波及してとんでもないことになっています。でも、トモについては明日で結審です。兄さん：僕はあの日いったい何をしたんです。ようか：兄さん、もう一度あなたに会いたいです。

引き割幕開く

舞台は非現実的な空間に変わる

彷徨っている男1の前を男2が無言で歩いていく。

男1は呼びかけているように見えるが、男2は振り返らない。

舞台は暗く不気味。

雲には戦争中の様々な映像がアトランダムに映し出される。

不気味な戦争の音が聞こえる

男1 兄さん。

男2 ……

男1 兄さん。

男2 ……

男1 兄さん…

そう言って二人とも去っていく

暗転

音だけが余韻を残す

裁判長の声 被告人、最後に何か発言したいことはありますか？

明転

男2 はい

男2 立ち上がる

男2 ああっ…来た来た来た来た来た来た来た… (がくつ)

男1 おいつ、トモ

裁判長の声 被告人、大丈夫ですか

間

男2 裁判長、最後に私の所信を語らせていただきますのですがよろしいでしょうか…有り難うございます。

昭和二十年七月二十一日一機の米軍機が婆山に墜落しました。飛行士は落下傘で脱出したものの重傷を負っていました。米軍機は婆山周辺を探索していたものと推察されますが、不思議なことにこのことは軍や警察の記録には一切残っておりません。墜落した機体も部品の一つまで回収されたらしくどこにもその痕跡を求めることができません。米軍兵士がどうなったかも定かではありません。しかし、米軍の記録にはこの日のことが残っているかもしれないと思えます。調査する価値があると思えます。この日、墜落した現場にこの村の少年七・八名が駆けつけています。そのうちの一人が被告人坂本知弘であり、弁護人の橋詰博です。この日、米軍兵士と少年達との間にやりとりがありました。米軍兵士は助けを請いました。英語を解さない少年達のうち二名は麓に連絡のために走り、現場には四・五人が残りました。

男1 トモ：どうしてそんな話を

男2 博、聞くんだ。お前を二十年間苦しめた話の顛末はこうだ。

戦争で肉親を失っていた弁護士橋詰博は直情的に米兵に対して殺意を抱きそれを行動に移そうとしました。被告坂本知弘以外の少年は恐怖心かられて村に逃げ帰っており、そこには米兵と被告、そして弁護人の三人だけしかいませんでした。弁護人は拳大こぶしだいの石を右手に持ち米兵に迫りました。弁護人は極度の興奮状態にあり、理性的な判断ができなかったのです。弁護人を制止しようとした被告は米兵の前に出ました。振り下ろされた石は米兵ではなく被告人の顔面をとらえました。

男1 えっ？

男2 弁護人は失神。その場に昏倒こんとうしました。被告は、被告坂本知弘は左目を負傷、失明に至るのですが、このいきさつを知られないために山に入って三日間村に帰りませんでした。：博、トモはお前をかばってあえて行方不明になったんだ。

男1 ？

男2 被告は左目を失明し山中を彷徨ほうこうするという極限状況の中で、今まで見えなかった靈魂を見ることができるようになりました。そしてまもなく自分の肉体に霊を憑依させることができました。しかしおおかたはウソであったと思います。それ故裁判長の心証は著しく悪く、時には退廷を命じられました。しかし、今は違います。私は被告の降霊術がウソではないことを証明するためにこうして降りてきたのです。新山忠則（にいやまただのり）裁判長。

BGM 「Beautiful Girls-Stand By Me (Boyce Avenue Ver.)」

君と二人で夜中に小石川から上野まで歩いたことがあったな。不忍池で自分たちの未来とこの国の行く末を語ったものだ…。

新山、おまえよくあの戦場から戻ったな。

裁判長の声 き、君は、橋詰君か？橋詰渉君か

男2 新山、日本の将来を頼んだぞ。（振り返り）：博

男1 （驚きのあまり声が出ない）

男2 大きくなったな、立派になった。

男1 兄さん！

男2 よく努力した。

：博、お前は自首しろ。米兵に対する傷害未遂とトモに対しての傷害について。事件自体が無かったことになっている現在、お前は罪に問われないかもしれない。時

効も成立している。しかしいずれにせよ、とにかくお前は自首しろ。いいな。そして闇に葬られつつあるこの事件に司直の手が及ぶようにするんだ。

博、真の弁護士になれ。日本は豊かになっていくだろう。豊かさは多くの人を幸福にする。しかしそれは貧しさを知っていればこそだ。俺の言いたいことが分かるな、博。

胸を張って自分の力で歩いて行け。考えてみるんだ、お前のその心で。お前にはそれができるし、そうするべきなんだ。

今のお前は、あのとときの俺より遙かに年上なんだぞ(笑)

時が満ちる。

傍聴席の皆さん。私は、私達はこの国が平和で豊かな国になることを信じています。私達の存在意義はそこにある。そしてそこにしかない。この国を緑の多い豊かで優しく美しい国にしていって下さい。

博、お別れだ。俺はもう行くよ。元気だな。

間

お前は俺の自慢の弟だ。今までもそうだったし、これからもずっとそうだ。

男2 男1にもたれかかるように倒れ込む。男1、抱えて

男1 兄さん！ 兄さん、…兄さん…兄さん

僕、僕…は

男2 起き上がり

男2 …博、兄さんに会えたか

男1 トモ、ごめん、俺、何も知らなかったんだ、ゆるしてくれ、

間

男2 兄さんの仇は取ったのか？

男1 それは、これからだ。兄さんの仇の正体を今はっきりと理解したばかりだからな。俺はそいつを打倒するために戦う弁護士になるよ。

男2 俺の弁護をしてることも忘れるな

男1 そうだった

Stand By Me

男2 たのむぞ

裁判長の声 これにて結審します

暗転

BGM 「Stand by Me」(川上達郎Ver.)

男1の声 兄さん、ありがとうございます。僕はあの日から一步前進することができました。自分の足で歩いていきます。今日は空がとてもきれいです。…さようなら、兄さん。いつかそちらに行ったらゆっくり話をしましょう。その日まで、さよならです。兄さん…

6

BGM カットオフ

男1 えーーーーーっ

明転(カッティン)

男2、2場初めのように妙な動きをしながら立っている

男1 えーーーーーっ

男2 ……

男1 えーーーーーっ

男2 本物だと思ったの？

男1 ウソだろ？いやウソに決まっている

男2 お前がそう思いたいなら、そう言うことにしておこう

男1 いや、だって、ほら。新山裁判長だって、橋詰渉君か？って言ってたじゃない。それじゃあれは、夜中歩いて上野まで行って不忍池で語り合ってたって

男2 ああ、あれ「こころ」…

男1 「こころ」？

男2 夏目漱石の「こころ」にそういう場面があるだろ。帝大生ならみんなそんなことするかな…と思って、当てずっぽうに言ってみた…

男1 えーーーーっ、そうなの。

男2 あのさ、ずっとマリリンとかリンカーンとかやるだろ。呆れられるまで。最後に真面目なのを一発やると、その落差でこれはもしかしたら本モノの降霊術師なのかも、って思わせちゃうっていう、…まあ作戦。

男1 じゃあ、やっぱり、お前インチキなのか。

男2 …

男1 俺はインチキ降霊術師の弁護を必死になんてしてたのか

男2 …博。あれからお前、自分が変わったって思わないか。

男1 それは…だって兄さんが自分の力で生きて行けって言ってくれたから…

男2 俺はインチキ降霊術師なんかじゃないよ

男1 じゃあ、兄さんは

男2 いや、あれは芝居、インチキだ

男1 トモ…

男2 なあ博、いいじゃないか。事実であることが大切なんじゃない。真実をつかみ取ることが大切なんだ。

男1 …

男2 お前は一人立ちしなきゃならなかった。自分でも分かっただろ。その時が来たんだ。キツカケはなんだっていいじゃないか。とにかくお前は歩き始めた。時が満ちたんだよ。

間（長めの）

男1 …分かった。

男2 分かればいいんだ。

男1 あれ？。じゃあ…俺がアメリカ兵に向かっていったこととか、お前の左目が失明したとか…あれは？

男2 さあな

男1 おいつ、トモ、いい加減にしろよ

Stand By Me

男2 だから、事実じゃなくて真実を掴む

男1 もう騙されないぞ、トモ。全部最初からやり直した。ちよつとそこへ座れ。

BGM 「Stand by Me」(ユト達郎Ver.)
舞台奥 引き割幕が少しずつ開いていく。

男1の声 兄さん…。この裁判、まだまだ先は長そうです。

続きはいつか話します。でも、トモには感謝しています。そして、兄さん、あなたにも。…胸を張って歩いていきます。そして、いつか本当の弁護士になってみせます。その日まで。さようなら、兄さん。

夕焼けに染まる夏空に浮かぶ入道雲

舞台暗くなる。

幕

了

第一稿 (5場まで) 二〇〇九年八月七日 河口湖畔にて

第二稿 (6場まで) 二〇〇九年一〇月一六日 甲府にて

第三項 (5場加筆) 二〇〇九年一〇月二四日

地区予選を明後日に控えて

第四項 (6場修正) 二〇〇九年一〇月二五日

地区予選の当日の朝に

第五稿(桃太郎のエピソードと方言追補)

二〇〇九年一月一四日

県大会九日前 双葉リハ六日前

第六稿(方言修正・キツカケ調整)

二〇〇九年一月二十六日

関東大会提出台本用